

学校現場における英語ライティング指導－教員研修に求められる役割

Teaching English Writing in the Classroom: The Role of In-service Teacher Training

村越 亮治

MURAKOSHI Ryoji

1. はじめに

「授業は英語で行うことを基本とする」という方針を明確に打ち出したことで、学校現場にある種のインパクトを与えた高等学校向け新学習指導要領が平成 25 年度より順次実施される。中学校においては、それに先立つ平成 24 年度に新しい学習指導要領が 1～3 学年の全面実施となる。「授業での英語使用」に関心が集中しがちであるが、中学校、高等学校の学習指導要領の改訂にともない、英語を「書くこと」「ライティング」についてもその指導目標や内容の記述に変化がみられる。本稿では、まず中学校、高等学校の学習指導要領において「書くこと」「ライティング」がどのように扱われているかを確認する。そして、それに基づいた検定教科書の中で英語を書く活動がどのように配置されているかを調査し、現場での指導の実際について、現場教員向けのアンケート結果を基に概観する。さらに、高等学校新入生のライティングのための文法知識に関わる分析に触れたのち、上記アンケートに基づき、教師自身のライティング機会の頻度と英文を書くこと・指導することへの自信の度合いと困難点を探る。そしてこれらの結果から、現職教員研修が果たすべき役割について考察する。

2. 学習指導要領における英語ライティングの扱い

2.1. 中学校の場合

英語を書くことの指導目標と内容に関して、現行 3 年生用、及び現行 1・2 年生用で平成 24 年度に完全実施となる中学校学習指導要領(文部科学省, 2011a; 2011b)では、表 1 のように定められている。ここでは特に明示的に「書く」と表記されている記述のみを拾い上げており、「伝える」など、話すこと、書くことの両方に関わる可能性のある記述は除外している。

特に注目すべきことは、24 年度完全実施版の「内容」において「文と文とのつながりなどに注意して文章を書く」の記述が入ったことで、ある程度内容的にまとまりのある一貫した文を書く指導の必要性が明確に述べられていることである。もちろんこれは、複数文からなるライティングの指導は従来は必要でなかった、ということではない。国立教育政策研究所による教育課程実施状況調査のペーパーテストでも、3～4 文のまとまった英文を書く能力を調査している。「文と文とのつながりなどに注意して」の部分に関して、「中学校学習指導要領解説 外国語」(文部科学省, 2011c)では、接続詞や副詞を使うことによる文と文の関連や順序、代名詞の適切な使用や他の表現での言い換えなどについて指導することが例として示されている。

表 1 中学校学習指導要領「外国語」における「書くこと」に関わる目標及び内容

(※ 下線は筆者による)

校種・科目	適用	区分	記述
中学校	現行 3年生	目標	英語で書くことに慣れ親しみ、初歩的な英語を用いて自分の考えなどを書くことができるようにする
		内容	<ul style="list-style-type: none"> ・文字や符号を識別し、語と語の区切りなどに注意をして正しく書く ・聞いたり読んだりしたことについてメモをとったり、感想や意見などを書いたりする ・自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように書く ・伝言や手紙などで読み手に自分の意向が正しく伝わるように書く
中学校	24年度 完全 実施	目標	英語で書くことに慣れ親しみ、初歩的な英語を用いて自分の考えなどを書くことができるようにする
		内容	<ul style="list-style-type: none"> ・文字や符号を識別し、語と語の区切りなどに注意して正しく書く ・語と語のつながりなどに注意して正しく文を書く ・聞いたり読んだりしたことについてメモをとったり、感想、賛否やその理由を書いたりなどする ・身近な場面における出来事や体験したことなどについて、自分の考えや気持ちなどを書く ・自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように、<u>文と文のつながりなどに注意して文章を書く</u>

2.2. 高等学校の場合－現行学習指導要領

現行の高等学校学習指導要領(文部科学省, 2011d)では、英語の必修科目は、「英語Ⅰ」または「オーラル・コミュニケーションⅠ」のいずれかということになっており、オーラル・コミュニケーションⅠのみを履修する生徒は、英語を書くという活動にはほとんど携わらないかもしれないのだが、ここでは書くことに関して明示的記述がある「英語Ⅰ」「英語Ⅱ」「ライティング」について、どのような指導が求められているかを見てみたい。

英語Ⅰ、英語Ⅱはいわゆる総合英語的性格を持った科目で、表2に示されているように、書くことを含めた4技能が目標の中に明示されている。内容では「整理して書く」の文言によって、複数文を書かせる指導が示唆されている。ライティングではそれに加えて、さまざまな場面で、いろいろな立場の人に向かって、異なった目的で書く、という活動が求められている。3科目とも、聞くこと・読むことなどの他技能と書くことの統合を示していることにも注意したい。

さらに、表2には示されていないが、ライティングの「言語活動の取扱い」の項では、「文章の構成や展開に留意しながら書くこと」という文言が、複数文からなるパラグラフライティングの指導を示唆している。また「リーディング」の指導内容のひとつとして、物語文を読んで感想を書くという、技能統合型のライティング活動が具体的に示されている。

表 2 高等学校学習指導要領「外国語」(現行)における「書くこと」に関わる目標及び内容

校種・科目	適用	区分	記述
高等学校 英語 I	現行	目標	日常的な話題について、聞いたことや読んだことを理解し、情報や考えなどを英語で話したり書いたりして伝える基礎的な能力を養うとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる
		内容	聞いたり読んだりして得た情報や自分の考えなどについて、整理して書く
高等学校 英語 II	現行	目標	幅広い話題について、聞いたことや読んだことを理解し、情報や考えなどを英語で話したり書いたりして伝える能力を更に伸ばすとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる
		内容	(目標に基づき「英語 I」の内容を発展させる)
高等学校 ライティング	現行	目標	情報や考えなどを、場面や目的に応じて英語で書く能力を更に伸ばすとともに、この能力を活用して積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる
		内容	<ul style="list-style-type: none"> ・聞いたり読んだりした内容について、場面や目的に応じて概要や要点を書く ・聞いたり読んだりした内容について、自分の考えなどを整理して書く ・自分が伝えようとする内容を整理して、場面や目的に応じて、読み手に理解されるように書く

2.3. 高等学校の場合－新学習指導要領

平成 25 年度から年次進行で適用される新しい高等学校学習指導要領(文部科学省, 2011e)では、「コミュニケーション英語 I」が必修科目として設定されている。現在、各高等学校で新カリキュラムが検討されているが、ここでは、新学習指導要領下で想定される英語の履修パターン(三省堂, 2009; 文英堂, 2011)において履修する生徒が多いと思われる科目について、書くことがどのように扱われているかを表 3 にまとめた。現行指導要領との比較のため、「書く」の明示的表記がない目標の部分の記述も載せている。

新科目「コミュニケーション I・II・III」は総合英語的性格を持った科目であるが、その目標の部分の記述を現行の英語 I・II と比べてみると、ライティングに関しては、ただ「書く」のではなく「適切に」書く指導が求められていることがわかる。また内容を見ると、他技能との統合的な活動の中で、「内容の要点を示す語句や文、つながりを示す語句などに注意しながら書く(I)」「まとまりのある文章を書く(II・III)」「論点や根拠などを明確にする(II・III)」「文章の構成や図表との関連などを考えながら書く(II・III)」「相手に効果的に伝わるように書く(II・III)」ことを指導する必要があることが示されている。総じて言えば、従前のパラグラフライティングのスキル育成に加えて、場面や相手を想定したライティング指導の必要性が述べられているということである。

表3 高等学校学習指導要領「外国語」(新)における「書くこと」に関わる目標及び内容

(※ 下線は筆者による)

校種・科目	適用	区分	記述
高等学校 コミュニケーション英語 I	25年度 より年次 進行	目標	英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、情報や考えなどを的確に理解したり <u>適切に伝えたりする</u> 基礎的な能力を養う
		内容	・聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどについて、簡潔に書く ・ <u>内容の要点を示す語句や文、つながりを示す語句などに注意しながら読んだり書いたりすること</u>
高等学校 コミュニケーション英語 II	25年度 より年次 進行	目標	英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、情報や考えなどを的確に理解したり <u>適切に伝えたりする</u> 能力を伸ばす
		内容	・聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどについて、 <u>まとまりのある文章を書く</u> ・ <u>論点や根拠などを明確にするとともに、文章の構成や図表との関連などを考えながら読んだり書いたりすること</u> ・説明や描写の表現を工夫して <u>相手に効果的に伝わるように話したり書いたりすること</u>
高等学校 コミュニケーション英語 III	25年度 より年次 進行	目標	英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、情報や考えなどを的確に理解したり <u>適切に伝えたりする</u> 能力を更に伸ばし、社会生活において活用できるようにする
		内容	(目標に基づき「コミュニケーション英語II」の内容を発展させる)
高等学校 英語表現I	25年度 より年次 進行	目標	英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、事実や意見などを多様な観点から考察し、 <u>論理の展開や表現の方法を工夫しながら伝える</u> 能力を養う
		内容	・読み手や目的に応じて、簡潔に書く ・ <u>内容の要点を示す語句や文、つながりを示す語句などに注意しながら書く</u> こと。また、 <u>書いた内容を読み返す</u> こと
高等学校 英語表現II	25年度 より年次 進行	目標	英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、事実や意見などを多様な観点から考察し、 <u>論理の展開や表現の方法を工夫しながら伝える</u> 能力を伸ばす
		内容	・主題を決め、様々な種類の文章を書く ・ <u>論点や根拠などを明確にするとともに、文章の構成や図表との関連、表現の工夫などを考えながら書く</u> こと。また、 <u>書いた内容を読み返して推敲</u> すること

話すこと、書くことに焦点を当てた「英語表現Ⅰ・Ⅱ」では、「論理の展開や表現の方法を工夫しながら」という文言が目標に入れ込まれており、ここでもパラグラフライティングと場面・相手に応じたライティングの指導をすることが示されている。内容を見ると、コミュニケーション英語Ⅰ・Ⅱに準じた事項の他に、「書いた内容を読み返す(Ⅰ)」「読み返して推敲する(Ⅱ)」という、校正及びプロセスライティングの指導への示唆も見られる。

3. 検定教科書におけるライティング活動

3.1 中学校の場合

上述の学習指導要領を受けて、現在6社から出版されている中学校検定教科書3学年分合計18冊の中で、どれくらいのライティング活動が設定されているかを調べた。ここでライティング活動としたものは、生徒が自分の経験や考え、活動の中で得た情報について英語で表現できるような自己表現の余地がある活動であり、決まった正答がある下線部補充のようなものは除外している。またそれぞれの活動で求められる書く分量については特に区別していない。

表4 中学校検定教科書におけるライティング活動の数

出版社	学年	技能統合型 ライティング活動	単独の ライティング活動	小計	合計
A社	1	2	3	5	20
	2	3	2	5	
	3	4	6	10	
B社	1	2	2	4	17
	2	4	3	7	
	3	4	2	6	
C社	1	4	1	5	23
	2	9	1	10	
	3	5	3	8	
D社	1	3	2	5	17
	2	1	6	7	
	3	1	4	5	
E社	1	5	1	6	14
	2	2	3	5	
	3	1	2	3	
F社	1	4	4	8	18
	2	1	4	5	
	3	1	4	5	

表4にあるように、書くことに関わる自己表現活動には、「聞いたことについて書く」「読んだことについて書く」「やり取りしたことに基づいて書く」「書いたことを口頭で発表する」といった技能統合型のものと、ライティング単独のものが見られる。各社各学年のレッスン(ユニット)数は大体10課前後だとして、平均

すると2課に1つ以上のライティング活動が用意されていることになる。

3.2 高等学校の場合

高等学校の英語検定教科書については、かなりの数の種類があるため、ここでは概観的に、総合的に英語を扱う「英語Ⅰ」「英語Ⅱ」と、「書くこと」に特化した「ライティング」の中の書く活動の扱いについて言及する。英語Ⅰ・Ⅱにおいては、自分の英語で文(文章)を書かせる明示的な活動は中学校の教科書と比べるとかなり少なくなっている。またライティングについては、多くの教科書が3部から4部構成になっており、前半のかなりの部分は文法や表現をターゲットとして書かれ、多少の自己表現コーナーもあるものの、言語知識の再確認のための問題演習が教科書での主な活動になっている。後半あるいは終盤にパラグラフライティングやエッセイライティングの活動が設定されている。

4. 教室の現状

実際に教室で生徒たちに取り組みさせている英語を書く活動の種類について、現場教師36人(中学校3人, 高等学校33人)にアンケート調査を行った結果, 下の表5のようになった。ここでは自己表現活動だけでなく、授業で頻繁に行われていると考えられる英文筆写や和文英訳なども書かせる活動として数えている。

表5 授業における英語を書く活動(中学校・高等学校)

校種	回答数	英文筆写	サマリー	和文英訳	スピーチ原稿	文法オリジナル文	語彙オリジナル文	日記	複数文 ~1パラ	複数 パラ
中学校	3	3	0	1	2	1	1	1	1	0
高等学校	33	19	8	19	10	20	11	2	12	8
計	36	22 61.1%	8 22.2%	20 55.6%	12 33.3%	21 58.3%	12 33.3%	3 8.3%	13 36.1%	8 22.2%

中学校についてはサンプル数が少なく、傾向も推測できないため、他の数人の現場教師にインフォーマルインタビューを行った。その結果、現行の週3時間の授業では、複数文で書くことを要求するものをはじめ、教科書に用意されているすべてのライティング活動に取り組みさせるのはかなり困難であることがうかがえた。平成24年度から授業時間が週4時間になるが、その分新しい教科書のページ数も増えている。英語を書く活動が新指導要領全面実施の中で、実際に学校現場でどのように扱われていくかは注視したいところである。

高等学校では、学習した文法事項を使ったオリジナルの1文を書かせる活動、和文英訳、英文を書き写す活動が広く行われていることが推測される。言い換えれば、ライティングは言語知識定着のための service activity としてとらえられている傾向があるということかもしれない。ライティングそのもののスキルを育成するというよりは、むしろ英語を書かせることで、スペリングや文法学習の一助とするというねらい

がうかがえる。学習指導要領で示されている、まとまった複数文を書かせる指導については、このアンケート結果からだけでなく、筆者の現場経験や情報交換から察するに、現実的にはなかなか広まらないようである。とはいえ、文法項目によってコントロールされた形ではあるが、オリジナルの 1 文を書かせる活動は、生徒にとって英語で自己表現をすることができる大きな第一歩であると言えるだろう。

まとまった英文を書く活動があまり活発に行われなかったことにはいくつかの理由が考えられる。

まず一つは、入学試験による波及効果が小さいということである。例えば、神奈川県の中学生在受験する公立高等学校入学者選抜学力検査では、一部(いわゆる難関校)の独自入試問題を除けば、まとまった英文を書かせる問題は出題されていない(かつては和文英訳が出題されていたこともあった)。採点数の多さと採点の信頼性を考慮すれば無理もないことである。大学入試においても、記述式のライティング問題を課しているのは、難関校と言われる大学をはじめとするごく一部の大学(学部)である。その現状の中で、すべての生徒にパラグラフライティングの指導をする必要性は見いだされにくいだろう。

次に考えられる理由は、指導にかなりの時間を要するという点である。生徒が書く量が増えれば増えるほど、それだけチェックに要する時間が膨大になる。特にスピーチ原稿などでは、生徒の英文作成への自由度が高い分だけ誤りも多くなる。間違った英語で話させるわけにはいかないとせば、相当な時間と労力と赤ペンのインクを費やしてすべての誤りを訂正せざるを得なくなり、結果として当人が書いた文章とはかけ離れたものになってしまった、ということにもなりかねない。

もう一つは、教師の学習者としての経験と指導経験が十分でないということである。生徒・学生時代に英文ライティングの訓練を受けてきた、あるいは教職課程でライティングの指導法をしっかりと学んできたという教師は決して多くないだろう。少なくとも筆者には、中学校・高等学校の授業の中で複数の英文を書く練習をした記憶はまったくない。生徒・学生の頃にやった和文英訳は何とかこなせるが、まとまった英文を書くこと、ましてやそれを生徒にわかりやすく指導することは、多くの教師にとって簡単なことではないかもしれない。

5. ライティングで生徒が使える文法・構文の知識

つながりを持ったまとまった英文を書くためには、ある程度の文法や構文を使いこなせることが必要である。高等学校入学直後の 200 余名の生徒が書いた自由英作文の中に、どのような言語特性が見られるかを、項目応答理論(Item Response Theory: IRT)に基づいて分析した研究(村越, 2012)では、使えるようになっていると言える文法項目・構文のうち、3 分の 2 は中学校 1 年生、残りの 3 分の 1 が中学校 2 年生の既習事項であった。関係詞、現在完了などの 3 年生で学習する文法事項はまったく含まれていなかった。詳細に見てみると、3 年生の既習事項については、使おうとして間違っただけというより、使うことを思いつかなかったか使うことを回避したという傾向があることが推測できた。入学試験及び複数の外部テストにより、被験者の英語力は同年代の学習者の中では中位であると判断でき、この結果がある程度の一般性を持っている仮定すれば、客観問題等では正答できる文法・構文も、英文作成の際にはみずから引き出して使用できるとは限らないということになるだろう。楽観的に見れば、文法・構文の知識が使用につながるには時間がかかるので、待っていればその後の学習で繰り返し触れることで使用できるよ

うになるということも言えそうだが、悲観的に見れば、英語を書くということになると、いつまでたってもせいぜい中学校 1・2 年生の文法・構文でしか書けないという化石化が起こっているという可能性も否定できない。いずれにせよ、学習指導要領の目標を達成するためには、中学校 1・2 年生で学習する文法・構文より高度なものが使えるようになる必要があるし、また自然にできるようになるのを悠長に待っている時間も保証もない。特に高等学校では、まとまった文を書く活動を積極的にとり入れ、生徒に言語知識を使わせる機会を十分に与えることが必要である。

また、高等学校でライティングを指導する場合、まず生徒が中学校で学習してきたことを熟知し、それによって指導の重みづけを考えることも重要である。例えば、文の内容を深めるのに多くの生徒が使おうとする **because** 節について言えば、従属節としての **because** 節をターゲットとなる項目として設定しているのは、6 社の中学校検定教科書のうち 2 社だけである。その 2 社の教科書で学習してきた生徒も含め、多くの生徒が **Why**-疑問文に対する答えとしての “**Because**…” という口語表現にあまりにも慣れていて、ライティングの際に、主節をともなう従属節として使うことができず、“**Because**…” のみで 1 文(断片文)としてしまうという顕著な傾向がある。上述の高校生 200 余名について、入学時、2 学年のはじめ、3 学年のはじめに英作文の中の **because** の使用状況を調べたところ、入学時には約 97% の生徒が断片文として **because** 節を書いており、その後の継続的指導によってある程度の改善が見られたが、2・3 学年時でも 60% 強の断片文使用者が残った (Murakoshi, 2012)。まとまりのある英文をある程度正確に書かせるためには、生徒の文法・構文に関する知識の広さ・深さを知り、それに応じた指導をすることが求められるだろう。

6. 現職教員研修の役割

学校現場でまとまった英文を書く指導があまり積極的に行われていないことについて、考えられるいくつかの理由を前述したが、ここでは、それぞれの理由として推測される課題に対して、現職教員研修がどのように寄与することができるかを考察する。

まず、指導に時間がかかる、指導経験が十分でないというライティングの「指導法」に関わる課題については、どのような研修が必要かつ有効であると考えられるだろうか。ライティングを「指導する」という観点から、まとまった英文を書く指導にどれくらい自信があるか、またそのような指導をする際にどのような点が難しいかということについて、前述の現場教師 36 人にアンケートに答えてもらったところ、それぞれ表 6, 7 のようになった。80% 以上が、まとまった英文を書く指導に対して「あまり自信がない」「自信がない」と回答しており、特に難しさを感じることで多くの教師が、「語彙選択」(意味・統語的には正しく見えるが語法上適切か適切でないかなど)、「誤りの訂正方法」(どのような誤りをどのようにどの程度訂正すべきか)、「評価の方法」を挙げている。目標に応じたさまざまな評価方法や指導ポイントに応じた訂正の方法などを、教員研修の中で具体的な形で扱う必要があるだろう。「語彙選択」については、微妙な差異となると母語話者並みの感覚が必要になるかもしれないが、研修の中で、コーパスの活用など教師が指導に使える方法を提示し、演習を行うことで、ライティング指導への不安感を軽減することができるだろう。

表 6 まとまった英文を書く指導に対する自信

	回答数	まあまあ自信がある	少し自信がある	あまり自信がない	自信がない
中学校	3	0	0	2	1
高等学校	33	2	4	18	9
計	36	2 5.6%	4 11.1%	20 55.6%	10 27.8%

表 7 まとまった英文を書く指導の困難点

校種	回答数	文法	構成	語彙	語彙 選択	句読法	フィード バック	評価法	訂正法	その他
中学校	3	1	0	0	2	0	0	2	3	0
高等学校	33	11	15	14	25	4	12	16	24	2
計	36	12 33.3%	15 41.7%	14 38.9%	27 75.0%	4 11.1%	12 33.3%	18 50.0%	27 75.0%	2 5.6%

あまりまとまった英文を書いたことがないという、教師自身の学習者としての経験の少なさという課題は、個々の教師が意識的にライティングの機会をできるだけ多く持つということでは解決しそうもない。しかし、教科以外の仕事で多忙を極める昨今の学校現場にあって、みずから継続的にライティング課題を課していくのは容易なことではないだろう。また、例えば ALT(外国語指導助手)が授業時間外でも対応してくれるような状況がなければ、書いたものをチェックしてもらうということも困難である。日常的な英文ライティングの頻度について聞いたアンケートでは、36人中21人の教師(58.3%)が、まとまった英文を書く機会は「あまりない」「まったくない」と答えている(表8)。その種類については、教科書のリライトやサマリー、Eメールと回答した教師が多かった(それぞれ61.1%、41.7%:表9)。いずれも、書くべきことを整理して、論理的な構成を考えながら書くという種類のライティングではない。

表 8 教師自身の日常的にまとまった英文を書く機会

	回答数	頻繁にある	時々ある	あまりない	まったくない
中学校	3	0	0	2	1
高等学校	33	1	14	11	7
計	36	1 2.8%	14 38.9%	13 36.1%	8 22.2%

表 9 教師自身のまとまった英文を書く機会の種類

校 種	回答数	教科書の リライト	教科通信	Eメール	論文等	ブログ等	その他
中学校	3	1	0	1	0	0	0
高等学校	33	21	1	14	0	5	5
計	36	22 61.1%	1 2.8%	15 41.7%	0 0.0%	5 13.9%	5 13.9%

もし、教師自身がそのようなパラグラフライティングの経験を多く積んでいくことができれば、生徒に対する指導にも自信を持って取り組むことができるだろう。まず教師自身が良い書き手となって、生徒の力に応じたモデルを示せるようにならなければならない。まとまった英文を書く自信に関するアンケートでは、約 64%の教師が「あまり自信がない」「自信がない」と答えている(表 10)。その困難点として多くの教師が挙げているのは、「語彙選択」(88.9%)、「構成」(52.8%)である(表 11)。「語彙選択」は生徒の指導における困難点としても第 1 位に挙がっていたが、教師が書こうとする英文は生徒のものよりも複雑で、語彙のニュアンスの違いを区別して表現しなければならないこともあるだろう。コーパス等を使って自力で校正していくには限界がある。また「構成」についても、自信を持って指導するためには、教師自身が英文のさまざまなテキスト構造を経験的に知っている必要があるだろう。このような課題を克服するためには、教員研修の中で、継続的に母語話者からの指導やフィードバックを得られるようなライティングプログラムを展開することが有効である。また、継続性と現場の多忙な状況を考慮して、Eメールを活用したオンラインの研修を組み込むことも実効性が高いだろう。

表 10 教師自身のまとまった英文を書く自信

	回答数	まあまあ自信がある	少し自信がある	あまり自信がない	自信がない
中学校	3	0	0	3	0
高等学校	33	2	11	16	4
計	36	2 5.6%	11 30.6%	19 52.8%	4 11.1%

表 11 教師自身のまとまった英文を書く上での困難点

校 種	回答数	文法	構成	語彙	語彙 選択	句読法	その他
中学校	3	1	0	2	2	0	0
高等学校	33	10	19	12	30	8	1
計	36	11 30.6%	19 52.8%	14 38.9%	32 88.9%	8 22.2%	1 2.8%

参考までに「書く機会」「書く自信」「指導する自信」の関係をクロス集計表(表 12, 12, 14)で見ると、書く機会があまりないことがあまり書く自信が持てないことにつながり、それが指導にあまり自信を持ってないことに関係しているように見える(サンプル数が少ないため統計学的に有意な関連性は示せない)。

表 12 教師の「書く機会」と「書く自信」の関係

書く機会 と 書く自信 のクロス表

			書く自信				合計
			まあまあある	少しある	あまりない	ない	
書く機会	頻繁にある	度数		1			1
		書く機会の %		100.0%			100.0%
	時々ある	度数	1	7	6		14
		書く機会の %	7.1%	50.0%	42.9%		100.0%
	あまりない	度数	1	2	9	1	13
		書く機会の %	7.7%	15.4%	69.2%	7.7%	100.0%
	まったくない	度数		1	4	3	8
		書く機会の %		12.5%	50.0%	37.5%	100.0%
合計	度数	2	11	19	4	36	
	書く機会の %	5.6%	30.6%	52.8%	11.1%	100.0%	

表 13 教師の「書く機会」と「指導する自信」の関係

書く機会 と 指導自信 のクロス表

			指導自信				合計
			まあまあある	少しある	あまりない	ない	
書く機会	頻繁にある	度数			1		1
		書く機会の %			100.0%		100.0%
	時々ある	度数	1	3	8	2	14
		書く機会の %	7.1%	21.4%	57.1%	14.3%	100.0%
	あまりない	度数			9	4	13
		書く機会の %			69.2%	30.8%	100.0%
	まったくない	度数	1	1	2	4	8
		書く機会の %	12.5%	12.5%	25.0%	50.0%	100.0%
合計	度数	2	4	20	10	36	
	書く機会の %	5.6%	11.1%	55.6%	27.8%	100.0%	

表 14 教師の「書く自信」と「指導する自信」の関係

書く自信 と 指導自信 のクロス表

			指導自信				合計
			まあまあある	少しある	あまりない	ない	
書く自信	まあまあある	度数	1		1		2
		書く自信の %	50.0%		50.0%		100.0%
	少しある	度数		3	8		11
		書く自信の %		27.3%	72.7%		100.0%
	あまりない	度数	1	1	10	7	19
		書く自信の %	5.3%	5.3%	52.6%	36.8%	100.0%
	ない	度数			1	3	4
		書く自信の %			25.0%	75.0%	100.0%
合計	度数	2	4	20	10	36	
	書く自信の %	5.6%	11.1%	55.6%	27.8%	100.0%	

多くの生徒にとって入試にあまり関係がないという理由から、まとまった文を書かせる活動がなかなか進んで行われないという課題は、もっとも根が深いと思われる。このことは「何のために英語を教えているのか」という究極的な教師哲学に関わる問題である。新しい学習指導要領に基づいた「高等学校学習指導要領解説 外国語」(文部科学省, 2011f)では、「総説」のところで、知識基盤社会化, グローバル化にともなう国際競争, 異文化との共存, 国際協力の必要性の中で「生きる力」を育むことがますます重要であると述べられている。また、コミュニケーション英語Ⅲの目標の「社会生活において活用できる」という文言を、高等学校卒業後に就く仕事や、高等教育機関での学習・研究, その他様々な生活の場面において、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする能力を生かすことができるということであると説明している。学習指導要領を持ち出すまでもなく、英語教師ならば少なからず、将来生徒が英語を使って世界の人たちとうまくやっていけるようになることを願っているはずである。しかし、生徒・保護者のニーズという大義名分のもとに、いつの間にか入試をクリアさせることが最終目的化し、それが入試に直接関わらないように見えるライティングやスピーキングなどを、積極的に指導しない言い訳として使われてはいないだろうか。一人の教師として、英語科というプロ集団として、また学校全体として「どのような力や態度を持った生徒を育てたいか」「どのような姿にして送り出したいか」ということを真摯に考えれば、「入試合格」を超えた、指導要領よりもさらに具体的で生徒の実態に則した、英語科としての到達目標が必要になる。それは生徒の成長に英語学習がどのように貢献できるかを示す所信表明であり、段階的な指導項目、授業での言語活動を設定するための道標となる(村越, 2011)。教員研修においても、個々の教師のスキルアップに寄与するだけでなく、設定した到達目標に基づいて授業を設計するという、小技に終始しない大局的な授業力を身に着けることに役立つプログラムが必要である。また、その成果を受講者が勤務校でシェアすることで、実質的な「協働」を進めることができるような仕組みを作ることも望まれる。

7. おわりに

本稿では、英語のライティングについて、学習指導要領で求められている指導内容と教科書のタスクを確認し、学校現場での指導と生徒の英文を書くための知識に関わる課題をまとめながら、その課題解決のために何が必要か、特に教員研修がどのように関わることができるかを考察してきた。ライティングを指導する上でもっとも大切なことは、生徒の卒業後の学びやグローバル社会の中で生きる将来を見通した、「育てたい生徒像」を教師集団が共有し、まず「どのような英文をどこまで書けるようにするか」という目標設定をすることである。そのためには生徒の学習履歴を確認し、現在の書く力や文法知識を知ることが必要である。生徒の書く力を知ること、書く力を身に着けさせることも、実際に「書くこと」をさせなければできないことである。教科書に書く活動が用意されていなくても、生徒のその時点での能力と到達目標を考えながら、ライティングタスクをデザインしなければならない。英語を書くことを指導するためには、まず教師自身がよい英語の書き手になることが必要である。ライティング指導のさまざまな側面において、教員研修が多忙な教師の拠り所として貢献しなければならない。そのためには、積極的に研修を受けられる体制と、成果をシェアする雰囲気作りが学校現場に求められるだろう。すべては「生

徒の将来のため」である。生徒が自分なりの英語で自分の考えを表現することができるようになるために、自信と技を身に着けた教師によって、より効果的なライティング指導が学校現場で行われることを期待したいと思う。

(参考文献)

- 国立教育政策研究所. (2011). 「平成 15 年度小・中学校教育課程実施状況調査 教科別分析と改善点 英語」
http://www.nier.go.jp/kaihatsu/katei_h15/H15/03001051030007004.pdf (アクセス日:2011 年 12 月 6 日)
- 三省堂. (2009). 「特集新学習指導要領—新旧学習指導要領比較— I . 全体構成」
tb.sanseido.co.jp/english/h-english/pr/09_summer/2009_sanseido_03.pdf (アクセス日:2011 年 12 月 6 日)
- 文英堂編集部. (2011). 「新学習指導要領の展望と新しい教科書」
www.bun-eido.co.jp/t_english/ujournal/uj73/uj371019.pdf (アクセス日:2011 年 12 月 6 日)
- 村越亮治. (2011). 「アクション・リサーチで進める『協働』—目標に基づいた高校英語授業のデザイン—」『教育デザイン研究』第 2 号. 横浜国立大学.
- 村越亮治. (2012). 「日本人高校生英語学習者の英作文に見る文法特性」『ARCLE REVIEW』第 6 号, ベネッセコーポレーション.
- Murakoshi, R. (2012). The Development of the Use of 'Because-clauses' by Japanese High School Students. 『コーパスに基づく言語学教育研究報告 8』. 東京外国語大学.
- 文部科学省. (2011a). 「中学校学習指導要領 外国語(平成 10 年 12 月告示, 15 年 12 月一部改正)」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/990301/03122602/010.htm (アクセス日:2011 年 12 月 6 日)
- 文部科学省. (2011b). 「中学校学習指導要領 外国語(平成 20 年 3 月告示, 24 年 4 月完全実施)」
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/gai.htm (アクセス日:2011 年 12 月 6 日)
- 文部科学省. (2011c). 「中学校学習指導要領解説 外国語」
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2011/01/05/1234912_010_1.pdf (アクセス日:2011 年 12 月 6 日)
- 文部科学省. (2011d). 「高等学校学習指導要領 外国語(平成 11 年 3 月告示, 14 年 5 月, 15 年 4 月, 15 年 12 月 一部改正)」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/990301/03122603/009 .htm (アクセス日:2011 年 12 月 6 日)

文部科学省. (2011e). 「高等学校学習指導要領 外国語(平成 21 年 3 月告示, 25 年 4 月から年次進行実施)」

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2011/03/30/1304427_002.pdf (アクセス日:2011 年 12 月 6 日)

文部科学省. (2011f). 「高等学校学習指導要領解説 外国語」

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2010/01/29/1282000_9.pdf (アクセス日:2011 年 12 月 6 日)